



第11回全日本小学生ボウリング競技大会

8月21・22日/稲沢グランドボウル

4年生から6年生まで144選手が熱投 男子は3学年とも両手投げ選手が優勝



▲各部門の優勝者、左から女子4年生・関根井、5年生・林、6年生・渡邊、男子4年生・田中、5年生・中田、6年生・齋藤の各選手

今年で11回目を迎える全日本小学生ボウリング競技大会だが、この大会を経てその後ナショナルチームやプロボウラーとして活躍する選手が数多く誕生するなど、文字どおり登竜門的な役割も担っている。コロナ禍ということで例年より参加人数が少なかったが、それでも小学4年生から6年生までの男女144名が参加して元気いっぱいのプレーを展開していた。(主催：全日本小学生ボウリング競技大会実行委員会)

今年も予選6G、準決勝3Gを投球し、9Gトータル上位2名を決勝に選出、決勝は1Gマッチで優勝を争う(その模様は公式YouTubeで配信された)という新方式で行われた。

4年生の部

男子は、予選を1188で1位の田中謙臣選手(栃木・宇都宮市立錦小)が、準決勝ではさらにペースを上げて、2G目の288を含む726を打ち、トータル1914で断トツの1位。田中選手には離されたが、1606の石原昭太郎選手(愛知・名古屋市立千鳥小)が2位で決勝に進んだ。決勝は、2つのダブルなどで194の田中選手が171



▲「決勝は途中で諦めそうになった」と振り返ったが、両手投げで女子4年生の部優勝の関根井選手

の石原選手を抑えて優勝を飾った。

女子は、神田結羽選手(愛知・みよし市立黒笹小)と関根井文音選手(北海道・札幌市立開成小)が首位争いを繰り広げたが、神田選手が45ピン差をつける1位で決勝に進んだ。決勝も一進一退で10フレ勝負となったが、1投目ともにスプリットを神田選手がオープンとしたのに対し、関根井選手は②⑤⑦をナイスカバーのあとストライク、153:141で優勝を決めた。

5年生の部

男子は、準決勝で694と伸ばした中田元輝選手(東京・八王子市立城山小)がトータル1915で1位通過、中田選手から43ピン差の2位で浅野目拓也選手(北海道・札幌市立東光小)が決勝に進んだ。決勝は、ターキースタートでリードを

奪った中田選手が、6フレからのフォースでリードを広げ、234:167と快勝した。

女子は、4年生で優勝している林恋幸選手(愛知・一宮市立三条小)が、1450の1位通過で連覇へ王手をかけた。同じ愛知の林虹歌選手(一宮市立奥小)が25ピン差の2位で決勝に進出した。

決勝は中盤オープンが続いた恋幸選手が10フレ1投目ストライクで逆転へ望みをつないだが、2投目はスプリットとなって万事休す。虹歌選手が153:151と2ピン差振り切った。

6年生の部

男子は、5年生の部を制しており、連覇がかかる齋藤大哉選



▲5年生男子は中田選手が「5フレにスプリットになってボールを替え」6フレからフォースで完勝



▲「決勝まで残れると思っていなかった。楽しく投げようと思ったのがよかった」と5年生の部を制した林虹歌選手

手(埼玉・川口市立戸塚東小)が1931の独走で1位通過、同じ埼玉の五月女瑛太選手(川口市立上青木南小)が81ピン差の2位で決勝に進出した。決勝は、ダブルスタートで先行する齋藤選手が、10フレをパンチアウトで締めて、212:178で五月女選手を下し、見事に連覇を達成した。

女子は、両手投げの井上夢望選手(愛知・瀬戸市立水野小)が、渡邊陽選手(広島・福山市立深津小)に57ピン差をつける1位で決勝に進んだ。決勝は、序盤ともにスプリット



▲「序盤でリードできたので後半は無理をしなかった」と冷静に、5年生時に続く連覇を達成の齋藤選手

などでオープンが続いた。中盤以降もなかなか攻略法を見つけられない井上選手に対し、渡邊選手が5フレからのダブルなどで172:135と制して初優勝を飾った。



▲4年生時に2位の渡邊選手「メンタル強化に努めてきた」と、見事に最終学年で初優勝を飾った



▲4年生の部を制した田中選手は「(準決勝までの9Gで)全体1位を狙っていたので悔しい」と優勝にも不満顔